



横大判錦絵 天保4~5年(1833-34) 亀山市歴史博物館蔵

CHRONICLE
OF MIE
VOL. 1

【美術編】

山口 泰弘 やまぐち やすひろ
教育学部・美術教育講座教授
専門は江戸時代絵画史
1955年生まれ

江戸の人々を見事な風景画で熱狂させ、
ゴッホやモネらに大きな影響を与えた
江戸の浮世絵師、歌川広重。
東海道を歩いた絵師は
日本と西洋の伝統を調和させた傑作を
亀山宿で生み出している。

東海道 五十三次之内 亀山 雪晴

雪の降り続く静かな夜が明けた朝、
雨戸を開けた途端目もくらむほ
どの日差し。温暖化の影響なのかどうか、
こんな経験をすることも近頃めっきり減っ
てきている。今回取り上げるのは、まさに
この懐かしい雪晴れの朝を描いた浮世
絵風景画である。

雪がやんできれいに晴れ上がった空
の山際はまだほんのりと朱の色を残す。
松の木立は朝日と強い雪の照り返しを
浴びて白黒の陰影を濃くする。街はまだ
雪の下で深く眠ったままの早朝、旅人の
行列だけが胸突き坂を黙々と登っている。
描かれているのは東海道の宿駅のひと
つ亀山宿。右上に見える石垣と櫓は亀
山城の京口門で、その名の通り京都方
面から来た旅人が亀山宿に入る城戸
口に当たる。

「東海道五十三次」は東海道の53の
宿駅を描いた絵画のことで、起点である
江戸日本橋と終点の京都三条大橋を
合わせた55景でシリーズ化されることが
多い。本作を含むシリーズは、天保3年
(1832)、幕府の八朔御馬献上の行列
に加わって京に上った歌川広重が、道
中で接した実景をもとに制作したと伝え
られる。東海道五十三次の絵は広重以
前にもあったが、道中風俗を描くのが普

通であった。旧来のスタイルを見直して
街道の景観に主眼を置いたのがこのシリ
ーズの画期的なところで、人物画が中心で
あった浮世絵に風景画という新分野を
確立することになったばかりでなく、広重
自身の出世作ともなった。今日では、その
重要性によって数ある東海道ものと区



三代歌川豊国「歌川広重像」 東京都江戸東京博物館蔵

歌川広重 うたがわひろしげ

浮世絵師
1797年~1858年

江戸八代洲河岸に定火消同心の子として生まれる。13歳で家
督を継ぐが、文化8年(1811)頃、歌川豊広に入門。歌川広重の
名を与えられた。文政6年(1823)、家業を子に譲り絵師に専念。
代表作「東海道五十三次」によって一躍その名を高め、その
作風は印象派の画家たちにも強い影響を与えた。

別する必要から、版元の名を採って「保
永堂版(東海道五十三次)」と呼ぶ。

ところで日本美術は長い間、光を表現
することや光が演出する劇的な効果に
は無関心であった。光の面白さによろ
く関心が向けられ始めたのはやっと18
世紀半ばのことであったが、光を描いても
とも高い芸術的達成を示した作品のひ
とつ、それが雪晴れの光に映える本作
である。光に対する関心を呼び覚ませ
たのは、意外なことに、鎖国下にありなが
らも長崎を通して細々と流入していたヨー
ロッパ絵画であった。

旅は夏のことであったので、広重は冬
の亀山を知らない。にもかかわらず、見も
知らない亀山の冬を描いたばかりか、保
永堂版の各図を春夏秋冬の季節に対
応させ、同時に朝昼夕夜の配分にも腐
心している。東海道の変化に富んだ四
季四時の景趣を丁寧に描き分けること
が、広重が大切としたもうひとつの関心事だ
たのである。歌枕として聞こえた各地の
名所を四季の移り変わりとともに描く、平
安時代以来のやまと絵の伝統を深く意
識してのことである。

日本の伝統に外から吹き込まれた新
風を巧みに溶かし込んだところに、この
希有の風景画が生まれたのである。



(左) 亀山城京口門を望む。石垣の上に櫓が見える。亀山宿
西端を守るため、寛文12年(1672)に築かれた。1910年頃
の写真。(亀山市歴史博物館蔵)

(右) 亀山城京口門下から見た旧東海道。古い家並みが残る。
道は関宿、鈴鹿峠を越えて京に至る。